

平成30年度 第4回 全校研究会報告

日時 平成31年 3月 22日(金) 9:00~12:15

研究協力者 大和大学教育学部 教授 落合 俊郎 氏

第4回の研究会では、平成30年度取り組んできた「教育課程改善」と「地域社会連携」の報告のほか、先進校視察の報告を行いました。また、前回の分散会で意見交流を行った「自分なりに社会貢献する」「主体的に幸せに生きるための力」についてのイメージ共有を踏まえ、それらの視点に基づいた「やってみたい授業づくり」へと一歩進めた内容で協議を行いました。研究プロジェクトからは、平成30年度の総括と平成31年度の研究をさらに進めていくための取組や各書式の提案を行いました。研究会の最後には、大和大学教育学部の落合俊郎氏、京都府教育庁指導部特別支援教育課指導主事相馬裕一氏より指導助言をいただきました。

取組報告 「可能性を最大限に伸ばし、社会貢献を実現するためのカリキュラムマネジメント」

◎教育課程改善について

小・中・高の学部ごとにそれぞれの編成の方向性が示され、「可能性を最大限に伸ばす」という視点での改善のポイントが報告されました。

小学部では、低・中・高の生活年齢による学びの連続性を重視しつつ、遊びの指導、生活単元学習を軸にして、これら「合わせた指導」の効果的な帯状配列と「音楽」「体育」「図工」の教科別指導における「生きて働く知識」の習得を考えた教育課程について報告されました。

中学部では、学習課題を基本にした4つの教育課程で、「各教科等を合わせた指導」と教科別の指導を効果的に組み合わせ、「知識の相互関連」に加え、多様な学習集団が保障できるよう週時程表の統一を学部内で図る工夫について報告されました。

高等部は学習課題を基本にした7つの編成となっています。特徴としては、「各教科等を合わせた指導」の形態から教科別を中心とした横の系統性を考えた教育課程へと改善しました。また、作業学習の時間を充実させ、社会生活に必要な知識や力の育成を重視し、一日の中で続けて授業を行うことも含め、縦横の帯状で授業配列がなされたことも改善のポイントになっています。

また、どの学部も地域社会との連携協働を視点においた教育課程となっています。

平成31年度から、これらの教育課程に基づいて教育活動を展開し、新たに統一形式での振り返りを行うことでさらに教育課程改善を進めていくことになりました。



◎地域社会連携について

「地域社会と連携した教育活動」として行ってきた各学部の1年間の取組について報告されました。小学部では、長岡京市環境の都づくり会議の方々と行った「たけのこ掘り」等、中学部では、国語科の単元「多様な人とのコミュニケーション」で学習した成果を発揮すべく、特別養護老人ホーム旭が丘ホームへの訪問等について、高等部では、株式会社高野竹工の方を講師にお招きして取り組んだ作業学習「箸作り」など、学部に応じて様々に取り組んだ内容が報告されました。全校的には学校祭で、「佛教大学よさこいサークル紫踊屋」の方をはじめ、たくさんの団体にご協力いただき、取組を広げていくことができたことを振り返りました。

平成30年度から地域社会連携部を立ち上げ、連携先の拡大とともに校内の発信を行い、各々のニーズに合わせた連携を広げられたことが大きな成果でした。今後は、お互いのニーズに合った連携をすること、学校でつけた力を地域で発揮するという視点も大切になることなどが課題として挙げられました。地域に出るからこそわかることもあり、また、地域の方からも好意的なご意見もいただいております。今後の教育活動の広がり期待もてる報告となりました。



◎広島県立庄原特別支援学校

地域の活性化、地域で働くことを視点におき、立地や地域との連携の利点を活かした授業を行っている学校で、庄原式カリキュラムマネジメントのシステムのもと、日々の実践に取り組まれています。この庄原式カリキュラムマネジメントでは、単元でつきたい力、使用教科書、評価の観点を明記した単元計画を作成した上で、指導路案には評価の観点を必ず記入し、PDCAサイクルによる授業改善、教育課程改善を実施されています。「庄原式授業づくり」として書籍化もされており、参考にしたい内容が多く報告されました。

◎広島県立福山北特別支援学校

児童生徒の作品が校内の至る所に掲示されており、一人一人の可能性を大切にしていることが伝わる学校で、玄関の近くには地域の方も入りやすいカフェが設置されています。小・中・高の学びの連続性を視点においた教育課程になっており、比較的軽度の児童生徒が多く、そのような状況に応じてカリキュラムが組まれています。作業学習では、カフェに来られた地域の方に向けて、手洗い洗車を行うこともあり、労働に対して対価が発生することを学ぶ場にもなっています。学校環境を活かした施設設備が充実している学校であるため、本校としては、ソフト面において参考となる内容が多くあると思われました。

◎広島県立三原特別支援学校

校訓が「礼儀・感謝・挑戦」となっており、教職員の方々がまず率先して具現化している校風が感じられました。作業学習が充実しており、スキル重視ではなく「人の役に立つ」という視点を大切にされたもので、特徴としては、一日通して行う日が週2日設定され、重度の生徒も同じ空間で支援アイテムを活用しながら一緒に取り組んでいます。その中では、失敗からの学びを重視し、生徒の主体性や課題解決能力を育むことを大切にされています。また、3Mプロジェクトチーム会議(系統性のあるカリキュラムマネジメント作成を目的とした教員の主体的・対話的深い学びのための組織)を設け、学びの連続性を追求した系統性のあるカリキュラムマネジメントを進めておられ、本校としても学ぶべき点の多い報告でした。

◎京都市総合支援学校4校合同研究会、京都府立盲学校・丹波支援学校

上記3校と同じように、地域社会との連携、学部の系統性、児童生徒の可能性を追求した実践研究が行われており、「地域資源マップ」など独自の取組を進めておられる学校もあり、発想や意識を変えていく必要性を含め、いずれも学ぶべき内容の多い学校でした。

先行事例研究として、これらの実践例からは、児童生徒が社会の一員として社会貢献していく可能性を見出すことができました。

分散会

「自分なりに社会貢献する」「主体的に幸せに生きる力」ということについて、前回の分散会で交流し合った内容をカテゴリーに分けてまとめたものをもとにイメージの共有を図りました。さらに、その視点に基づいて、他校や校内で実際に見聞して良かったと思われる実践や自分たちが「やってみたい」と思う具体的な授業について意見を出し合いました。「やってみたい授業」というところでは、どの分散会でも様々なアイデアが積極的に出され、お互いの話に触発されたり、これまでに本校で大切にしてきたことを改めて確認し合ったりすることができました。

研究プロジェクトからの報告

2年目となる文科省指定研究をさらに充実させるために、平成30年度の研究の総括と平成31年度の研究の方向性、具体的な作業について報告を行いました。地域社会との連携協働の下で創造する「喜びをともにする授業」～多様性は可能性～というテーマで行ってきた1年間の研究成果について、改めて振り返ることで次に目指すべき方向性も明らかになりました。とくに「自分なりに貢献する」ということについては、「この世に生まれてきて存在していること」「精一杯自分のもっている力を使って生活すること」「人との関わりやつながりのなかで、何らかの役割を得ること」「共生社会の形成に影響を与えること」の4つの項目で整理でき、この視点を授業づくりに活かしていくことを共有しました。平成31年度は、年間指導計画、授業改善シートの充実に加え、教科・領域関連表を新たに作成し、教科の内容を明確にしていくこと、児童生徒の変容エピソード集の作成により、児童生徒の変容＝授業の評価と捉え、授業改善につなげていくことを通して、研究の充実を図っていくことを提案しました。学びの連続性を意識した教育課程、生きる力につながる教科の視点と教科横断的視点について課題整理をしながら、地域住民や保護者の方々、学校評議員会の評価を取り入れ、地域社会と連携協働した教育活動の在り方のさらなる充実を目指していきます。



大和大学教育学部 教授 落合俊郎先生からの指導助言

ご自身が学校評議員をされていた広島県のことを例に挙げていただきながら、何よりも教員の質の向上が欠かせないこと、そのために研究、授業改善、公開授業、PDCA サイクル等の必要性を粘り強く浸透させることの大切さを改めて話していただきました。特別支援学校技能検定の開始、福山支援学校の自立活動ハンドブックの作成、「広島学びの変革アクション」等、広島県が進めている具体的な実践内容から、障害のある人の社会貢献について考えていくことの大切さを話していただきました。これまでご協力頂いた研究資料を含め、本校の教職員がいつでもアクセスできるGoogle Classroom にはたくさんの資料提供を頂いており、今後の研究に大いに活用させていただき、研究の充実に努めていきたいと思っております。*研究会後にも授業改善に関する新たな資料を提供していただいております。

京都府教育庁指導部特別支援教育課 相馬裕一指導主事からの指導助言

本校が取り組んでいる教育課程改善、授業改善の報告を受けて、「社会に開かれた教育課程」において、卒業後を見据えたカリキュラムマネジメントの必要性、そのための早い段階でのキャリア教育の視点、学びの連続性の視点が重要であることを教えていただきました。また、福祉との連携がより一層大切になることのほか、活動内容や成果について学校が積極的に発信することの大切さについて強調され、本校が今年度新たに取り組んだ「学校祭」については、児童生徒の笑顔や地域の方たちの好意的な感想そのものが成果である、とのお言葉をいただき、今後取り組むうえでの励みとなりました。

◎感想用紙より



今年一年で、地域社会とのつながりは大きく広がったように思いますが、もっと本校の子どもたちが地域に出ていき、また、地域の方にはもっと来ていただけるような取組をしていきたいです。



「社会貢献」とは…と考えると難しいですが、古今問わず様々な実践を意識した上で、一日、一日、子ども一人ひとりが「楽しい」「やってよかった」と思える授業実践に取り組んでいきたいです。



先進校の取組はとても刺激的でした。小中高の連続性の中でどのような子どもを育てるのか、教師だけではなく、子ども自身も保護者も地域も同じ方向を向いて取り組めると感じました。時間があれば、もっと詳しく教えていただきたいです。

